

中級Ⅰコースにおける作文クラスでの問題点

藤牧 喜久子

要 旨

筑波大学では現在、補講コースとして初級Ⅰ、初級Ⅱ、中級Ⅰ、中級Ⅱ、上級のクラスが設けられているが、本稿では中級Ⅰコースでの作文クラスで学生から提出された作文をもとに、各学生の持つ問題点から、クラスでの指導上の問題点を考え、今後の指導を見つめ直していくもとしていきたいと思う。

【キーワード】 中級クラス テ形接続と連用中止 文体 作文表現

0. はじめに

筑波大学では現在補講コースとして初級Ⅰ、初級Ⅱ、中級Ⅰ、中級Ⅱ、上級の各クラスが設けられており、この中で初級を終えて中級レベルに入った段階の中級Ⅰコースには、聴解、漢字、文型・文法、読解、作文のクラスが設けられている。このうち筆者が担当しているのは読解と作文のクラスであるが、本稿では作文クラスにおいて学生から提出された作文をもとにそれぞれの学生がどのようなところに問題点を持っていたのかを考察し、クラス全体としての問題点を考えていきたいと思う。作文における問題点にはさまざまなものがあるが、今回は主に、テキストに示されている作文表現を学生が使う上での問題点と、テ形接続と連用中止について問題を、学生が書いた作文の中で見ていくことにした。この読解と作文のクラスでは凡人社発行の佐藤政光・加納千恵子・田辺和子・西村よしみ著『実践にほんごの作文』をテキストとして使用しているが、基本的には読解クラスで各課の作文表現および表現に注意しながら文例を読み、作文のクラスでそれをもとに作文練習をしていくというやり方をとっている。本稿では次の作文およびテ形接続と連用中止に関する練習問題の結果をもとに考察を進めていきたいと思う。

- ・自己紹介文
- ・自分の国の教育制度について
- ・グラフを説明した文
- ・引用文
- ・賛成意見・反対意見を述べた文

学生の作文例として本文中で引用したものには○をつけて示すこととした。また、例文中のアンダーラインは問題点を明らかにするために筆者がつけたものである。今回は上に述べたような問題点について検討したので、引用した例文に今回考察したものにかかわらないような文法上の問題や

語彙的な問題があったとしてもそれにはふれないことにした。

1. 教科書について

0. はじめにで述べたようにテキストは凡人社発行の佐藤政光・加納千恵子・田辺和子・西村よしみ著【実践にほんごの作文】を使用しているが、中級Ⅰコースではこの本の第1課から第5課までを学習することになっている。それぞれの課の学習項目は

- | | | | |
|----------------|--------------|------------|-------|
| 第1課 事実を述べる(1) | ・説明する | ・定義する | ・分類する |
| 第2課 事実を述べる(2) | ・変化の様子を述べる | ・比較する | |
| | ・対比する | ・因果関係を述べる | |
| 第3課 引用して述べる | ・原文通りの引用 | ・要点をまとめた引用 | |
| 第4課 意見を述べる | ・判断(断定、推定)する | ・主張する | |
| | ・感想を述べる | | |
| 第5課 意見に反論・同意する | ・反対意見を述べる | ・賛成意見を述べる | |

という構成になっていて、それぞれの課の中に文例、文例の中に出てくる表現、この課の作文表現、練習問題が含まれている。

中級Ⅰのコースではこのテキストと、教師が作成したテキストの理解を助けるためのプリントと応用問題などを使って授業を進めている。

2. 学生について

また本稿では1990年前期の中級Ⅰコースの学生の中から10名を選んでそれぞれの作文を検討したが、このコースが補講コースであるという性格上、欠席者が比較的多いということもあり、出席数が多くて作文の提出回数が多い学生を選ぶことにした。学生の国は次のとおりでそれぞれAからIとした。

- | | | |
|---|--------|----|
| A | 台湾 | 男性 |
| B | 中国 | 女性 |
| C | 韓国 | 女性 |
| D | 韓国 | 男性 |
| E | 韓国 | 女性 |
| F | 韓国 | 男性 |
| G | アルゼンチン | 女性 |
| H | フランス | 男性 |
| I | インドネシア | 男性 |

以上の学生について、0. において述べたような作文および練習問題の結果にあらわれた問題点についてみていくことにする。

3. 1 自己紹介文

自己紹介の文は毎期コースの最初の時間に書かせるものである。コースの最初の時間は話しことばと書きことばの違いを再確認させ、普通体の「だ体」と「である体」についての練習をさせ、自己紹介はこの「だ体」あるいは「である体」を使って書かかせてみたものである。この作文は「だ、である体」で書かせることもあり、日本でどのようなことを学びたいかという自分の希望を中心に書かせるようにしている。なおこの作文の提出者はA、B、E、G、H、I、Jの7名であった。

3. 2 自己紹介文に現れた問題

最初に書かせたこの作文において、あらわれた問題は次のようなものである。

3. 2. 1 「だ・である体」についての問題

まず文章を「だ体」あるいは「である体」で書けているかどうかという点について見てみると、ほとんどの学生はこの文体を意識しているようであった。しかし、中には学生Aの文のように「です・ます体」とまぜて書いてしまっているものもあった。例えば、

○私は台湾からきたAと申します。 (A)

○台湾の医薬学院の薬学系を卒業しました。 (A)

○いもうとはいまアメリカに住んでいます。 (A)

などというように作文を書かせるまえに行なった口頭での自己紹介をそのまま文章にしてしまっているものがある。これは特に自分と自分の家族のことを説明するとき「です・ます体」を使ってしまう傾向があり、他の学生にもこのような問題点が見られた。自分の国の状況を説明するときは

○日本へ来る勉強する人はだいたい文学、教育、いろいろなを勉強したい人だ。 (A)

○日本の医学と薬学と環境の研究は世界の先端だ。 (A)

などのように普通体でかかれていることが多い。

3. 2. 2 口語表現の使用

口語表現でしか用いない表現を普通体の中に持ち込んでしまっている例もある。例えば

○Hと申す。 (H)

○私はインドネシアから来たIと申し、..... (I)

のように口頭での自己紹介のとき使う「～と申します」という表現をそのまま使ってしまった場合があった。

3. 2. 3 発音からの影響

母語の発音から影響を受けていると考えられるものもあった。例えば、

○つくば大学にもりっばな先生がいらっしゃであるだから留学をしただ。(E)

○私の主人がつくば大学は近いである高エネルギー物理学研究所に研究のためにきたのがかさなった。(E)

というようなものである。

3. 2. 4 「～のである体」の文章について

また全体が目立つのは「～のである体」の文がうまく作られていないということである。

○だが旅行よりも違う文化の国に休んでいることの方が好きなのでそのために長い期間で日本に休んでいるのを去年に決めたんだ。(H)

という例などは「～のである」の会話的な表現をそのまま使ってしまった例であるが、「～のである体」を使った方が自然であろうと思われるところで、これが使えていないということが目立つ。

○Echocardiogram と心電図負荷検査などを研究したいため、日本に来た。(E)

という文は文脈の中で「のである」を使用したほうが自然であるのに使われていないし、

○いろいろな新しく理論を勉強するために日本に来たである。(I)

という例もあった。A、B、H、I、Jの7人中5人にこの問題がみられた。

3. 2. 5 名詞文と理由表現について

何かを説明するときの「～は～ことである」や理由を説明する「～は～からである」という文を書けないことも全体が目立った問題点であった。例えば、

○希望は日本語を話せるうようになりたいです。(A)

○一番の目的は日本の資料を使え、このテーマの研究を続ける。(G)

という場合のように、最後に「ことである」で結ぶべきところで、それができていないという場合があった。

また、

○日本のように先端技術を持った国へ留学したかったということであった。(J)

というように、「日本へ来た目的は」などというような表現が文頭に来るべきであるのに、それをぬかしてしまっている場合などもあった。

理由を述べる表現では

○何故日本に来るかという理由はたくさんあると思う。第一、フランスで日本語を少し勉強し

ておもしろかった。(H)

のように最後に「～からである」とすべきところを、それを使わないで終わってしまっているという例は多く見られた。

4. 1 テ形接続と連用中止の練習問題

この練習問題はテキストに含まれていたもので、説明および練習問題は付録2にしめしたとおりである。この練習は第1課に入る前に行ない、授業では説明の部分と一緒に読んで、練習問題は1をやっただけであとは宿題として各自やってみて提出するようにしたものである。この宿題の提出者はA、B、C、D、F、G、H、I、Jの9名で、提出しなかったEも説明をした授業には出席していた。

4. 2. 1 テ形接続と連用中止の練習問題にみられる誤用数

それぞれの問題における誤答の数は次のとおりである。

表1

問題	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
人数	2	2	4	0	4	4	0	5	0	4	4	1	0	0	0

3と5を共に間違えている学生は4人、8と10と11とを共に間違えている学生は4人であった。また6と8を共に間違えている学生が3人いた。

これらの間違いの中で文脈から前の文が後ろに続く文の状況・状態、手段・方法、原因・理由を表しているとは理解できていない場合は読解力の問題として扱うべきであるが、文脈から理解していても形ができない場合はここでとりあげておきたいと思う。

4. 2. 2 状態を示すテ形

問題3と5の場合、前の文が後ろに続く文の状態を示しているためにテ形を使わなければならないのであるが、これらの問題を間違えた4人のうちA、H、Iはテ形を使わなければいけないということがわかっているも前の文の「～ている」のかたちをそのまま使って

○50階建てのビルが炎をあげていて、激しく燃えていた。(A)(H)(I)

のようにしてしまっており、このような場合の説明も問題をさせる前しておくべきであった。

4. 2. 3 「動詞十ない形」のテ形について

問題8と10と11は前の文が後ろに続く文の手段・方法を表しているのでテ形を使わなければならないが、これらの問題を間違えた4人のうちBとIはテ形を使わなければならないということはわ

かっている、動詞のない形が作れないで、

○いやな仕事でも不平を言わなくて、一生懸命する。 (B) (I)

○手術をしなくて、病気を治そうとする。 (B) (I)

のように「形容詞+ない形」のテ形と混同してしまっていた。

4. 3. 問題点についての検討

上のような動詞のない形がテ形になる場合はもちろん初級段階で何度も学習したことであるし、連用中止の用法などについても中級Ⅰの学生たちはこのコースが始まる前に触れたことがあると思われる。ここでもう1度復習し、学生は用法を再確認したわけであるが、この場合は文が与えられており、そこをテ形か連用中止を使ってつなげればよいので、今後じっさいに学生が書いた文を添削するときに、その使われ方に注意し、使いこなせるように指導していかなければならない。

5. 1 自分の国の教育制度について

この作文は第1課の最後にまとめとして書かせたものである。第1課は「事実を述べる」という課であるが、この課の作文表現は

- 1 ~を~と 言う/呼ぶ/定義する
- 2 ~は~と定義されている
- 3 ~と(いうの)は _____ (の) こと/意味/略 である。
- 4 ~と(いうの)は _____ (こと)を 言う/意味する。
- 5 ~では _____ を ~、~、~の一つに 区分している/分けている/分類している
- 6 ~は _____ により/~によって 構成されている
- 7 ~は _____ に 分かれている/分けられている/分類されている

があげられている。この自分の国の教育制度についてはテキストの文例4にイギリスの公教育制度を説明した文があり、これを参考にして書けばよいようになっている。文例4は次のようなものである。文例4の本文中のアンダーラインはテキストにも記されているものである。

[文例4]

イギリスの公教育制度は、初等教育、中等教育、継続教育の三段階により構成されている。初等教育は、2歳から11歳までの教育を言い、2歳から5歳までの学校を保育学校、5歳から11歳までの教育を初等学校と呼ぶ。初等学校は、さらに5歳から7歳までの幼年学校と7歳から11歳までの下級学校の2段階に分かれている。

この文例4には作文表現の1、4、6、7が含まれている。この作文の提出者はB、C、D、F、G、H、Iの7人であった。

5. 2 作文表現に関する問題点

5. 2. 1 作文表現の使用状況

各学生がどの作文表現を使ったかについては次のとおりである。○は正しく使用している場合を示し、×は誤用の場合を示している。

表 2

	B	C	D	F	G	H	I
1			○	×			×
2							×
3							
4			○	○	○		
5							
6	○		○	×	○	○	○
7		○	○	○	×	○	

5. 2. 2 作文表現 1 に関する問題

各作文表現の中で表現の 1 は 3 人の学生が使用しているが、問題になったものは、これと 4 を混同して使ってしまった場合であった。

○幼稚園と小学校は 3 歳または 4 歳から 11 歳あるいは 12 歳までの学校を初等教育と呼ぶ。(I) のように作文表現の 1 のかたちをとっている文の中に、作文表現の 4 を無理にはめこんでしまっている。これは学生 I が文例 4 を参考にして文を作成したために文例 4 の表現をそのまま使ったことから起こったことと考えられる。同様に学生 F の場合も作文表現 1 にも関する問題があったが、これは下の受身文にも関係した問題であるとも考えられるので、次の「受身形に関する問題」で述べることにする。

5. 2. 3 受身形に関する問題

まず、学生 F は作文表現 1 を使った文の中で

○初等教育は、8 歳から 13 歳までの教育を言い、国民学校と呼び、国からあらゆる経費を支給される義務教育である。(F)

というように受身形にしなければならないところをしていない。このようにしてしまっている学生は他にもあり、これは文中のすぐ前にある「教育を」から作文表現 1 の形を受身形になおさないで使ってしまったものと考えられる。

また受身形を使うべきでないところで使っている例としては学生 C の

○要するに高校の場合は中学校で学んだ教育内容の中で、一番自分に向いている、あるいは趣味にあって方向に進んで、将来の自分の就職先と絡んで人文あるいは工科に分けて教育されている。(C)

というものが、長すぎる文の中で混乱してしまっている。

また、上のCの文の中にもあるように自動詞と他動詞の使い分けができていない場合も多い。それを次に述べることにする。

5. 2. 4 自動詞と他動詞の使い分けについての問題

自動詞、他動詞に関する問題も全体に見られるものである。上のCの例でもあるように「絡めて」にすべきところを「絡んで」、「分かれて」にすべきところを「分けて」としてしまったり、Bのように

○子どもは小学校に入れて、……。(B)

と「入って」にすべきところを「入れて」を使ってしまっている場合もあった。

また、作文表現7を使う場合に

○アルゼンチンの公教育制度は、保育、小学校、中学校、大学の四段階に分けている。(G)

○中学校は基礎期と高等期に分けている。(G)

というように自動詞の「分かれている」あるいは受身形の「分けられている」を使うべきところを「分けている」としてしまっている場合もあった。

この問題は多く見られるが、全体として自動詞にすべきところを他動詞を使って書いてしまっているが多いようであった。

5. 2. 5 文体の問題

前回までの授業に関連した問題として、「だ・である体」と「です・ます体」を区別して、「だ・である体」で書いているかどうかという問題があったが、この作文においてはほとんどの学生は「だ・である体」を使っているようである。しかし、学生Dは、

○中等教育は13歳から16歳までの教育を言い、中学校と呼ぶ。その期間にはおもに高等教育のための基本的な知識を習っています。(D)

というように、第1課で学んだ作文表現を使う場合には「だ体」で書き、そうでない場合には「です・ます体」で書いてしまっていて、この文体の違いについて理解していないようであった。

しかし、他のほとんどの学生は使えており、自己紹介文の添削や授業でのフィードバックによって、理解したようであった。

5. 2. 6 テ形接続と連用中止について

今回提出された作文の中で連用中止をつかっているのは5. 2. 2で述べたFの「呼び」がある

が、これは誤用となってしまっている。その他は文例4でも見られたように「と言い」というかたちのみあるが、これはほとんどの学生が使っている。

しかし、テ形を、うまく使っていないために、学生Dの、

○韓国の男子は国民の義務な軍隊期間をたいていだいがくの2学年の時に入ります。30ヶ月の軍隊期間が終わると、また大学にかえって来ます。それから勉強を続けます。だから男子が大学を卒業する年は26～27歳になります。 (D)

のように文が短すぎて不自然なかんじになってしまっている場合や、逆に、5. 2. 2で見たCのようにテ形接続ばかり使って長すぎる文を作ってしまう場合もあった。

5. 2. 7 名詞文について

定義するという機能をもった作文表現3の「～とは～である」のかたちに関連して、一般的な説明に用いる「～は～である」という表現について

○国を豊にする重要な条件は教育水準のたかい。 (B)

のように「教育水準の高い」を「教育水準を高くすることだ」とすべきところをしていないものや、

○この学校の目標は技術を身につける (E)

のようにしてしまっているものがあるが、定義するという機能から応用して説明する時にもこのかたちを使うということがなかなかできていない。

5. 3 問題の検討

第1課で学ぶ作文表現は数も多く、似たようなものが多いため、学生自身も使えるようにするためには、できるだけ口頭練習や短い文を作る練習をする時間をもっととらなければならないようである。そして、それぞれの意味を学生に明確に理解させるようにして、5. 3. 3で述べたような応用のようなことも考えられるように指導していかなければならない。

また、5. 3. 2で見たように、長すぎる文あるいは短すぎる文を書いてしまうという問題も見つけられたが、これについてもこれまで十分な指導はできていなかったため、今後考慮に入れていくべきであろう。

6. 1 グラフを説明する文

この作文は第2課の最後に書かせた文である。この課の作文表現は

- 1 ー化
- 2 ーが 進んでいる／進められている
- 3 ーはー (こと) による
- 4 ー (の) 結果
- 5 ーの／が ーに占める割合は ーからーに増大／減少した。

- 6 ~に達すると 推計される／推定される
- 7 ~に対し(て)
- 8 ~の反面
- 9 ~と_____になる

というものである。ここで取り上げた作文は第2課の「事実を述べる」というなかでも「変化の様子を述べる」「因果関係を述べる」ことの練習のために書かせたものである。問題はC&P日本語教育・教材研究会編の『日本語作文Ⅱ』（専門教育出版）からグラフや説明などを引用したもので、作文練習の1は15歳未満の総人口に対する比率の変化を説明するもの、作文練習の2はおもちゃの輸出入額の推移とその原因について説明するもの（付録3）である。作文練習1の提出者はB、C、D、E、F、G、H、Iの8名で、作文練習2の提出者は B、D、E、F、Iの5名であった。

6. 2 作文練習1の作文表現に関する問題点

6. 2. 1 作文表現の使用状況

各学生がどのように作文表現を使ったかについては次のとおりである。

ただし、○は正しく使用している場合、△は応用的に使用した場合、×は誤用の場合を示している。

表3

	B	C	D	E	F	G	H	I
1								
2								
3								
4								
5	×	×	○		△		○	
6	×	△	○	○	×	×	△	○
7				○				
8								

6. 2. 2 語彙の理解について

作文練習1で使われると予想される作文表現は5と6があるが、表3によると5は3名の学生は使用していない。また、この作文表現を使っても、誤った使い方をしている学生も多いが、その問題点はまず、ことばの意味を理解しないで使っている場合であった。例えば、作文表現の「~に占める」ということばの意味がまだよくわかっていないために

○15歳未満者は昭和25年には総人口の35.4%に占めた。(B)

のようにしてしまうものや、グラフの説明にある「15歳未満者の総人口比推移」ということばをそのまま使って、

○15歳未満者の総人口比推移は段階的に減少していることがわかる。(C)

としてしまっている例もあった。

また、原因と理由の意味の違いについても第2課ではふれているが、学生Eはこれについてよく理解していないようであった。

6. 2. 3 受身形に関する問題

受身形に関する問題は作文表現5を使った場合に

○この部分の全人口に占められた割合は、..(G)

のように受身形を使ってしまったり、作文表現6を使うときに

○厚生省人口問題研究所は1995年には15歳未満の人口が総人口の17.6%になると推定されている。(B)

のようにしてしまう場合があった。この作文表現についての例はすべてこの受身形の表現を使ってしまっているものだったので、使われかたの違いについての説明が不十分であったことがわかる。

6. 2. 4 文体の問題

「だ・である体」について問題があったDはここではうまく使いこなしている。しかしEは自分の意見をのべるところのみ「です・ます体」を使ってしまっていた。

6. 3 問題の検討

作文表現の5や6は、口頭練習は十分に行なったつもりではいたが、このかたちを使った文例をより多く示すことによって、文に使われていることばの意味を理解させる必要がある。また、よく使われる「推移」ということばや、「原因」と「理由」のちがいなどということばも同様にいろいろな文例を示して理解を助ける必要があるだろう。

6. 4 作文練習2の作文表現に関する問題

6. 4. 1 作文表現の使用状況

各学生がどの作文表現を使用したかについては次のとおりである。

表4

	B	D	E	F	I
1					
2					
3					×
4					
5					
6	○	×			○
7					
8			○		

○正しく使用している場合
×誤用の場合

作文練習2で使われると考えられる作文表現は3であるが、3を使用しているのは1のみで、それも誤用になってしまっている。

6. 4. 2 原因や理由を述べる表現について

原因や理由を述べる表現として、第2課では作文表現3があり、これを使ったのはIのみであったが、

○現在、日本では、円高のため、これは国内大手メーカーが生産拠点を人権費などの安い東南アジアなどに移していることなどによる。(I)

というように文頭にくるべき「これ」の位置が間違っている。

しかし、他の学生がこのグラフの変化の原因について述べていないわけではない。学生Dは「このような減少の原因としては、……ことがあげられる」というこの課の文例1にある表現を使って述べている。Fも「その原因としては2つ考えられている。」としてはいるが、そのあと練習にある理由をそのまま写したかたちになってしまっている。

またEは「理由は……からである」という基本的な形をつかっているし、Bは原因について述べてはいるが、特にそれをあらわす表現を使ってはいない。

6. 4. 3 各文例の「表現」について

作文練習2にはこの課のそれぞれの文例にある表現を使っている場合が多い。まず「一方」という表現を使っている学生はB、D、Fでこの表現については使い方に問題はないようである。

また「境に」という表現を使っているのもB、D、Fであるが、Bの場合「境に」の意味を正しく理解しないで使ってしまったため

○昭和63年には輸出、輸入額を境に逆転するようになると推定された。(B)

というようにしてしまっている。

6. 5 問題の検討

作文表現3については短い文での口頭練習や書き練習は授業でもおこなったが、今後は比較的長い文を読んで、それをまとめて原因を述べる練習もしていくべきであろう。6. 4. 2で見たように新しく学んだ表現を使わずに自分の知っている形で書いてしまう場合もあり、新しいかたちも使ってみよう、指示する必要もあるだろう。

また6. 4. 3にあるように様々な表現については読んで意味を理解できるようにするというこで、使える練習はあまりしていなかったが、使ってみようと思っている学生も多く、使えるようになるための練習も今後考えていく必要があるだろう。

7. 1 引用文

テキストにある引用文の基本的な形として授業で扱ったのは

1) [著者] の『[出典]』に よれば/よると、[論ずるテーマ] は『[引用部分]』という(ことだ)。/ (だ) そうだ/そうである。

2) [論ずるテーマ] について [著者] は『[出典]』で/の中で『[引用部分]』と 言っている/述べている/書いている/語っている/主張している/説明している/訴えていると「 」を使わない用法として

3) [著者] は [テーマ] について [引用部分] と『[出典]』という本の中で書いている。という表現を学生に示した。

これはC&P日本語教育・教材研究会編の『日本語作文Ⅱ』(専門教育出版)を参考にしたものである。またテキストの作文表現には

1 ~によると、~そうである/という/ということである(伝聞)

というものがあり、これはAのかたちを簡単に述べたものである。上の引用の基本的なかたちの文末の他にテキストでは「指摘している」「言明している」「考察している」「結論している」が示されている。ここで取り上げる練習はテキストの練習Iにあるもので、上の3)の形になおす練習である。提出者は練習の1、2はA、C、D、E、F、G、H、I、Jの9名で、3、4についてはD、Fの2名のみであった。

7. 2 作文表現に関する問題

これは「 」をとりはずしたかたちなので、問題1は引用部分も普通体にすることが望ましい。この点について、学生EとDに問題があった。Eは

○.....広いのですと『小説入門』という本の中でいっている。(E)

とそのまましてしまっており、Dは「...広いだと.....」と普通体ではあるものの形容詞の場合の

作り方を間違えているようであった。また問題3、4についてもDは

○……それを感じただと『死をみつめる心』という本の中で言っている。(D)

○……思うようになったと『忘れられた日本人』という本のあとがきに書いている。

というように、動詞文の場合も普通体がうまく使えていないようである。もちろんこの問題はコースの最初から意識させている文体の問題でもある。

7. 3 問題の検討

この問題は、特に最初の2題は、与えられた文のかたちをかえるだけで、比較的やさしかったこともあり、他の練習ほど問題はないようであった。引用文のかたちは練習を口頭練習でも何度もおこなったことや、この課の作文表現がおもに3つしかかったことなどから、身につけやすいものになったと考えられる。

8. 1 賛成意見、反対意見を述べた文

この練習は第5課で学習したことをもとにした練習であるが、第4課、第5課は共に「意見を述べる」についての課であり、第4課で学んだ判断や主張などを述べるときに用いる様々な表現(付録4)を使って第5課での賛成意見と反対意見を述べる練習をしたものである。この練習の提出者はA、C、D、E、I、Jの6名であった。

8. 2 作文表現に関する問題

8. 2. 1 作文表現の使用状況

第4課では意見をのべるときの様々な文末表現を学んだが、この練習の中で学生が使った文末表現の使用状況をみると、次のようになる

表5

	A	C	D	E	I	J
～だ	○		○	○		
～である					×	
～だろう	○	○		○		○
～であろう		○			○	
～と思う	○		○	○		○
～と思われる			○	○		○
～といえる					○	
～といわれる						
～ものである						○

○正しく使用している
場合
×誤用の場合

のようになっている。第4課の作文表現を使って文を書くように指示はしてあるが、学生によって「～だ」や「～である」ばかり使ってしまったいたり、多くても4種類の表現しか使っていない。またIのように

○結婚していた人は同じ所で両親と住んでいれば、いっしょに世話をするの必要である。と「すべきである」などとするとところをこのようにしてしまった場合もあって、いろいろな文末表現をまだまだ自分では使いこなせるようになってはいないようである。

8. 2. 2 文体について

自己紹介文において「です・ます体」を使ってしまったAはここでも賛成文か反対文のどちらかにこれを使ってしまう、普通体と混用している

8. 2. 3 発音について

自己紹介文においても発音からの問題のあったEにはここでも「思った」「ずき(次)」などの問題があった。

8. 2. 4 受身形の問題

受身形の間違ひはこの文章のなかでもあり、

○経験することができることは感じられるからだろう。(E)

のように受身にすべきでないところを受身にしたり、

○両親自身も楽しみたいと感じられるからだろう。(C)

のように受身形あるいは可能形にしている場合もあった。

8. 3 問題の検討

内容的には賛成文、反対文とも自分のいいたいことを語彙などを適切に使って書けるようになってきているが、文末表現はこれまで使い慣れてきたものの他はなかなか使えてはいない。しかし、今後学生が日本語を使って、文章を書く場合これは必要なものであり、自分の考えにしたがってさまざまな主張や判断の表現を使えるようになる練習は今後考えていかなければならない問題であろう。また、この段階になっても、文体や受身形の使用の問題があり、文体については、強く学生に認識させる必要があるし、受身形については、文の構造の説明などもしていくべきであると考えられる。

9 まとめ

作文表現に関する問題は、まずそれぞれの作文表現を使いこなせるようになるまでの段階になるまでにはもう一歩足りないというところが多かったということである。それぞれの作文表現のかた

ちを理解し、それを使って短い文を作ることはできるが、いくつかの作文表現を使って、長い文を作ることはできない。それを解決するためにこれらの作文表現を使った文を文例の他にもより多く学生に提示していく必要もあるであろう。また、これらの作文表現を応用した読解練習をする機会も時間的な余裕を作ってふやしていかなければならないと思われる。

またすべての提出物の中にあられた問題として受身形についての問題があり、これは特に学生GやBに多く見られ、2人とも使わなくてもよいところでも受身形を使ってしまう傾向がある。作文表現という形の練習のみでは、このような問題は、なかなか解決されないもので、読解の段階から構造を詳しく説明する必要があることを、再認識させられた。

そして文体の問題はA、D、Eにコースの最後まで見られ、Aは一つの文章の中に「だ体」と「です・ます体」を使ってしまい、この問題について意識がされていないようであるし、Dは意識してはいるものの問題がのこってしまった。Dはコースの最初の日に欠席してしまったことも影響しているかも知れない。またEには発音からの問題が後半まで残ってしまった。

当然のことではあるが、作文はできるだけ早く添削し、学生の持っている問題は各個人に、また、その中で多くの学生に目立つ問題にはクラスでのフィードバックのときにすぐにおこない、あとの作文を書くときに学生に注意をうながす必要がある。また、1回注意しただけでは、なかなかおしきれないものも多く、何度も指導していくうちに解決されていくものもあるだろうと思われる。しかし、コースの間は、数多くの作文を添削するために、見落としてしまっている点が多かったり、また、全体が見えなくなってしまう場合もある。それぞれの学生が各課の作文表現などを使う上でどのような問題を起こしているか、そして、前の作文にあられた問題は、解決されているかというなど各個人別に見ていく必要も、今回再確認し、今後は、各学生にたいしてコースの最終段階でそれぞれの問題点について個人的にカウンセリングなどをおこなっていきたいと考えている。

参考文献

- 1 南不二男 1974 『現代日本語の構造』 大修館書店
- 2 木村宗男 1982 『日本語教授法』 凡人社
- 3 国際交流基金 1987 『教師用日本語教育ハンドブック①文章表現』 凡人社

付録 1

各学生の作文の提出状況

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
1	○	○			○		○	○	○	○
2	○	○	○	○		○	○	○	○	○
3		○	○	○		○	○	○	○	
4-1		○		○	○	○			○	
4-2		○	○	○	○	○	○	○	○	
5-1	○		○	○	○	○	○	○	○	○
5-2				○			○			
6	○		○	○	○				○	○

- 注) 1 自己紹介文
 2 テ形接続と連用中止の練習問題
 3 自分の国の教育制度について
 4-1 グラフを説明した文....15歳未満者の総人口に対する比率の変化
 4-2 グラフを説明した文....おもちゃの輸出入額の変化とその原因
 5-1 引用文....練習問題1・2
 5-2 引用文....練習問題3・4
 6 賛成意見・反対意見を述べた文

付録 2

テ形接続と連用中止について

I. 動作の時間的順序を示す文やいろいろな性質・状態を続ける文では、次のように、テ形を使っても連用中止を使っても表すことができる。

1. a 毎朝6時に起きて、(、)顔を洗って、(、)近くの公園まで散歩に出かける。
 b 毎朝6時に起き、顔を洗い、近くの公園まで散歩に出かける。
2. a 彼は、背が高くて、(、)ハンサムで、(、)金持ちだ。

- b 彼は、背が高く、ハンサムで、金持ちだ。
 (*名詞とナ形容詞のテ形、連用形は同形。なお、書き言葉では、「～であり」という連用中止、「～であって」というテ形も用いられる)
3. a 本当に大切なのは、疑うことではなくて、信ずることである。
 b 本当に大切なのは、疑うことではなく、信ずることである。
 cf. 本当に大切なのは、信ずることであって、疑うことではない。
4. a その当時、日本は、まだ教育水準がそれほど高くなくて、教育環境も整っていなかった。
 b その当時、日本は、まだ教育水準がそれほど高くなく、教育環境も整っていなかった。

上の文で、テ形接続の文は話し言葉的、連用中止は書き言葉的と言うことができるが、実際の作文では、テ形と連用中止を混ぜて使うことが多い。その際、1のような動作の時間的順序を示す文では、<ある動作に引き続いて次の動作が起きる>といった継起性が強い文同士はテ形でつなぎ、弱いものは連用中止でつなぐと、読みやすくなる。

例えば、1 bの文は、次のように直すことができる。

毎朝6時に起きて顔を洗い、近くの公園まで散歩に出かける。

II. また、次のように、テ形接続が二つの文の特殊な関係を表している場合は、連用中止の形に書き換えることができない。

1. 前の文が後ろに続く文の状況・状態(どのように)を説明している時。
 ○大の字になって寝ている。
 ○音をたてないで (たてずに)、ろうかを歩いた。
 (* 「～ない」の連用中止は「～ず」)
2. 前の文が後ろに続く文の手段・方法を示している時。
 ○一生懸命がんばって、この仕事を成功させよう。
 ○石を投げて、ねこを追い払った。
 ○彼は、この薬を飲んで死んだ。(自殺)
 cf. 彼は、この薬を飲んで、死んだ。(事故の原因→彼は、この薬を飲んだために死んだ)
3. 前の文が後ろに続く文の原因・理由を表している時。
 ○用事があって、明日は行けない。
 ○頭が痛くて、勉強ができない。
 ○交通事故で人が大勢死んだ。

III. その他の注意

ア. 「～している」の連用中止は「～ており」になる。

○多くの国がA国の先端技術に注目しており、その技術の各国への導入を望んでいる。

イ. 次のような敬語動詞の連用中止の形に注意。

おっしゃいます → おっしゃり
なさいます → なさり
いらっしゃいます → いらっしゃり
くださいます → くださり

ウ. 次のような連語表現は、どちらも書き言葉としてよく用いられる。

～に対して → ～に対し
～に関して → ～に関し
～と比べて → ～と比べ

エ. 「～ず(に)」の形は、<ナイ形>と同じであるが、「～する」の動詞は形が違うので注意。

行く → 行かず(に)
食べる → 食べず(に)
来る → 来ず(に)
する → せず(に)

【練習】

○次のそれぞれの文を、テ形接続か連用中止を用いてひと続きの文にしなさい。できるだけ書き言葉的な文にすること。

(例) 医学の水準が高まった。医療技術が進歩した。死亡率が低下した。

→医学の水準が高まり、医療技術が進歩して、死亡率が低下した。

(* 2 番目の文を連用中止にすると、前の二つの文と最後の文との原因・結果の関係をはっきりさせることができない)

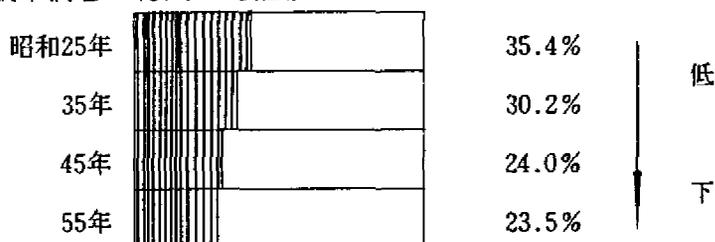
1. その男は、高等学校の制帽をかぶっていた。紺がすりの着物にはかまをはいていた。肩には学生かばんをかけていた。
2. 次の文章をよく読みなさい。
3. 50階建てのビルが炎を上げていた。激しく燃えていた。
4. 文化とは、ものを作って生活を快適にする工夫のことである。文化とは、ものを手に入れて生活を快適にする工夫のことである。文化とは、ものを使って生活を快適にする工夫のことである。
5. 彼女は、小さな声で歌を口ずさんでいた。編み物をしていた。
6. 風が吹いた。花びらが散った。それは柔らかい雪のように舞った。
7. 男は外で働く。女は家庭を守る。
8. いやな仕事でも不平を言わない。一生懸命する。
9. 鳥が池のそばに降りた。水を飲んだ。また飛び立って行った。

10. 明日はどこへも行かない。家で一日中寝るつもりである。
11. 手術をしない。病気を治そうとしている。
12. その人は、誰にでも親切だ。性格が明るい。みんなに好かれている。
13. 先生は、「返すのはいつでもいいですから」とおっしゃった。本を貸してくださった。
14. 彼女は、1990年に東京で彼と出会った。結婚した。子供を生んだ。幸せな家庭を持った。80歳まで生きた。
15. ミロのビーナスは、十九世紀の初め、ミロス島でその農民に思いがけなく発掘された。のちにフランス人に買い取られた。パリのルーブル美術館に運ばれた。

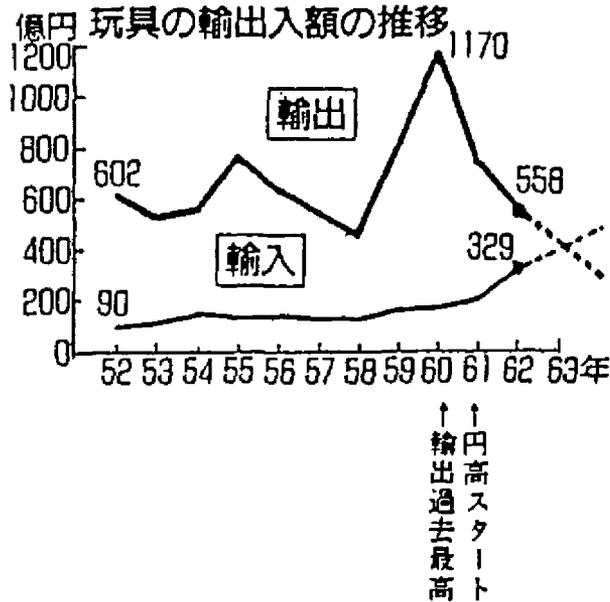
付録3

◇下の表は総務庁の推計によるものです。また厚生省人口問題研究所は1995年には15歳未満の人口が総人口の17.6%になると予想しています。これらのことを、[作文表現]を参考にしてまとめなさい。

* 15歳未満者の総人口比推移



◇下のグラフはおもちゃの輸出入推移についてのグラフです。このような推移の理由は次のように考えられています。これらのことを【作文表現】を参考にしてみてください。



<輸出減少、輸入増加の理由>

1. 円高のため、国内大手メーカーが生産拠点を、人件費などの安い東南アジアなどに移している。例えば、バンダイは中国に続き、タイにも工場を設けた。
2. おもちゃ問屋が価格の安いアジアNIE S（新興工業経済地域）からの輸入を大幅に増やした。

付録4

●この課の作文表現

1. ～と思う／～であろう……

意見を述べる時の表現にはいろいろなものがあり、それらは表現意図や気持ち^{かくしん}を確信度の強弱によって微妙^{びみょう}に使い分けられている。したがって、使い分けの基準を明確に示すことは非常に難しい。ここでは、「判断」したり「主張」したりする時の重要表現を表にしてまとめておくにとどめる。この表の中で、「判断」と「主張」の欄^{らん}だけは、ほぼ強弱（上→下）の順序に並んでいる。

判 断	主 張	そ の 他
<ul style="list-style-type: none"> ・～だ、～である (断定) ・～だろう、～であろう (以下、推定的判断) ・～(だ)と思う、 ～(だ)と思われる、 ～(だ)と考えられる、 ～だろうと思う ・～(の)ではないか、 ～(の)ではないだろう か、 ～(の)ではなからうか、 ～(の)ではないかと思う (幾分疑問の気持を示しつつ 行う判断) ・～(の)ように思う、 ～(の)ように思われる ・～かもしれない 	<ul style="list-style-type: none"> ・～なければならない ・～(べき)だ、 ～(べき)である、 ～(べき)だろう ・～することが必要だ、 ～する必要がある ～することが重要だ、 ～することが肝要だ、 ・～(べき)ではないか、 ～(べき)ではないだろ うか、 ～(べき)ではなからう か、 ～(べき)ではないかと思 う ・～したほうがいいのでは ないか、 ～したほうがいいのでは ないだろうか 	<ul style="list-style-type: none"> ・～にちがいない (確信的断 定) ・～ものだ (普遍性を強調し た断定) ・～わけた (当然性を強調し た断定) ・～(の)はずだ (根拠のあ る確信的推量) ・～(の)ようだ (根拠の薄 い主観的推量) ・～らしい (ある程度確かな 情報に基づいた推量) ・～であることは否定できな い (断定を避けた判断) ・～と言える、 ～と言えるだろう、 ～と言えよう (判断が可能であることを 示す)